

## 王陽明の「心中の賊を破るは難し」について

裴, 健  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18146>

---

出版情報：中国哲学論集. 20, pp.47-61, 1994-10-10. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 王陽明の「心中の賊を破るは難し」について

裴

健

はじめに

王陽明はその門人薛尚謙に宛てた書簡の中で次のように言っている。

即日已に竜南に抵り、明日巢に入る。四路の兵、皆な已に期のごとく並び進む。賊必ず破るの勢あり。某向まきに横水に在り、曾て書を仕徳に寄せて云う、『山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。区々風竊を剪除する、何ぞ異となすに足らん。もし諸賢心腹の寇を掃蕩して、以て廓清平定の功を収めば、此れ誠に大丈夫万世の偉績ならん』と。数日来諒に已に必勝の策を得たり。捷奏期あらん。何の喜びかこれに如かん。（『王文成公全書』卷四、以下『全書』と略称する）

この書簡は王陽明が正徳十三年（一五一八）、四十七歳の時、江西省信豊県竜南の農民暴動を鎮定した際に送ったものである。その書翰の中に「某向に横水に在り、曾て書を仕徳に寄す」とあるのは、正徳十二年十月、江西省崇義県横水の農民暴動を鎮定した時のことである。この書翰から、次の三つの点を明らかにすることができる。第一に、王陽明は「山中の賊」を破ることを目的としていたのではなく、「心中の賊」を破ることをも目的としていた。第二に、所謂「難し」という結論は長期にわたる「心中の賊」を破る活動の中から引き出されたものである。第三に、王陽明が二つの書翰で「心中の賊を破るは難し」と強調していることから、王陽明は「心中の賊」を破ることを重視していたこと及びその困難さを深く自覚していたことが判る。周知のように、正徳三年、王陽明が三十七歳の時、竜場での大悟で、良知心学はその基礎を構築してから、正徳十六年、五十歳の頃に致良知説を提唱するまで、十三年間

を経たのである。この間に、寧王の乱を含めて、「山中の賊」を輕易に鎮定したが、良知の説においては「百死千難中より得来る」のである。「心中の賊を破るは難し」についての思想は王陽明が四十七歳、致良知説の成熟しかける時期に提出されたもので、陽明の思想形成上に重要な位置を占めていると考えられる。この思想を提出した前後、王陽明は『朱子晚年定論』、『古本大学』を刊行し、また『象山文集』に序文を寄せている。これらは明らかに「心中の賊」を破る重要な手段としていたと考えられる。「心中の賊」は良知の対立物であるので、「心中の賊を破る」とは即ち良知を致すことであり、良知を致すことは即ち「心中の賊を破る」ことである。良知を致すことができるかどうかは「心中の賊を破る」ことができるかどうかによるのである。したがって、「心中の賊を破る」ことは致良知の鍵であると考えられる。「心中の賊を破るは難し」についての思想を検討することは、致良知の功夫論及び王陽明の日常活動とその学術思想との関係を理解するためにも意味のあることだと思われる。本稿ではこの問題をめぐって考察していきたいと思う。

## 一、「心中の賊」とは何か

王陽明の所謂「山中の賊」は山の中に隠れる「悪い人」、すなわち「反乱者」であるが、人々の心の中に隠れる「賊」は明らかに人々の心の中に潜む邪悪なものと言えよう。では王陽明にとって善と悪を判別する標準は何であろうか、勿論「良知」の二字しかあるまい。彼は良知は即ち天理であると認めているので、良知に合致しているものは「善」であり、人々が「良知」を致すことを妨げるものは「悪」すなわち「心中の賊」である。では、良知にとって、「賊」とは何であるか。以下、王陽明の所謂「心中の賊」を主として二つの点から捉えてみることにする。

第一に、私欲の問題が挙げられる。周知のように王陽明は心即理説を主張しており、次のように述べている。

心は即ち理なり。（『伝習録』上）

心の虚靈明覺は即ち所謂本然の良知なり。（同上）

良知の人心に在るは、聖愚を問たつることなし、天下古今の同じき所なり。（『伝習録』下）

王陽明の思考に従えば、心は即ち理であり、天理は即ち良知であり、人心に在る良知は、聖人でも常人でも等しく持っているのである。であれば、こういう問題が出て来る。つまり「人皆この心あり、心は即ち理なり、何を以てか善を為すことあり、不善を為すことありや」（『伝習録』上）ということであり、また、なぜ「良知を致すの上にあつて、一番の功夫を用いざること能はざ」（『全書』卷五）るのか、ということである。

このような問題に対して、王陽明は「悪人の心は、その本体を失うなり」、「知はこれの本体にして、心は自然に知ることを会す……もし良知の発にして、更に私意の障碍なければ、すなはち所謂その惻隱の心を充たせば、仁勝げて用ふべからざるなり。然れども常人に在りては私意の障碍なきこと能わず、所以に須く致知格物の功を用い、私に勝ち理に復るべし」（『伝習録』上）と解釈したのである。したがって、王陽明は人心の本体を失わせる原因こそ、私欲の障礙であると考えている。

では、王陽明の所謂「私欲」とは何であるか。陽明学の中で「欲」、「私欲」、「私心」、「私意」、「物欲」、「人欲」等は同じ意味を持っている概念であり、即ち色を好み、貨を好み、名を好むことと七情の過不及すること及び間思雜慮することを指しているのである。

では、王陽明も、朱子も、「天理を存し、人欲を去る」を口にしてはいたが、その意味あいが等しいのであるか、異なっているのであるか。勿論、その間にずれがあるのである。

まず、人欲を生ずる原因について、両者の考え方は異なっているのである。朱子は性即理の立場から出発して、人間がこの形（肉体）なるものを持つている限り、誰でも氣・形の原理にもとづく「人心」というものが存在しないということはあり得ないと考えている。彼は「人、是の形を有せざる莫し、故に上智と雖も、人心無きこと能はず」（中庸章句序）と述べているが、王陽明は心即理の立場から出発して、人欲を生ずる原因は「後世良知の学明らかならずして、天下の人その私智を用ひて以て相い比軋す」（『伝習録』中）と考えている。具体的に言えば、即ち「人はただ至善の吾心にあるを知らずして、その私智を用ひて以てこれを外に求む」（『全書』卷七「親民堂記」）、したがって、是非の道を誤り、私欲功利をほしいままにして、天理が減びると考えている。このように朱子の考え方によると人欲は人の生まれつきのもので、聖人であっても存在しないことはないが、王陽明の考え方によると、「人欲は

吾の本よりなき所」(『文書』卷六「答季明德」)で、聖人は人欲を持っているはずはなく、「常人」だけ「私意の障礙なきこと能は」ざるものである。

次に、天理と人欲との関係についても両者の考え方は異なっているのである。朱子は「天理人欲は、硬定するの界無し」、「人欲の中に自ら天理有り」(『朱子語類』卷十三)と考えている。これによれば聖人と常人との区別は人欲というものがあるかないかではなく、多少の区別があるだけである。それで、朱子は「必ず道心をして常に一身の主たらしめ、而して人心毎に命を聴く」(中庸章句序)と主張している。しかし、王陽明の立場から見ると、朱子の考え方に従えば、人欲を去ることが徹底できない。それで、王陽明は「天理と人欲とは並び立たず。安んぞ天理、主となりて、人欲また従いて命を聴くことあらんや」(『伝習録』上)と批判したのである。

このように王陽明の所謂「人欲」は、朱子の所謂「人欲」と意味が違っているのである。では、良知と私欲との関係はどうであるか、王陽明は次のように述べている。

若し物欲の牽蔽あることなくして、但だ良知の発用流行に循って去けば、即ちこれ道にあらざること無し。但だ常人にあつては多く物欲の牽蔽のために、良知に循い得ること能はず。(『伝習録』上)

つまり、王陽明は心の本体を恢復するために私欲の障礙を排除すべく、心の良知を充塞流行させなければならぬと考えている。従って良知にとって「心中の賊」は、まず私欲を指すと考えられる。

第二に、人間の胸中に纏いつく旧説旧習が挙げられる。そもそも、王陽明の思想によれば、良知は人人具足しているが、ただ私欲が障礙するため人心の本体を失うのであり、「人欲を去り、天理を存する」ことに功夫を用いれば、即ちその良知を致すことができる。

しかし、人欲を去らせようとすれば、人欲を生ずる原因を除外しなければならぬ。人欲を生ずる原因はすでに前に述べたように、王陽明は「良知の学明らかなら」ざるためと考えているが、では、どういうわけで、良知の学は明らかにならないのであるか。言い換えればなぜ世人は良知説を受け入れることが難しいか。王陽明は次のように述べている。

是非の心は、人皆これあり、彼はそれ但だ積習に蔽はる、故に吾が説において卒に未だ解し易からず。(『伝習

録』上)

此の学、世に明らかならざること久し、而して旧聞旧習、障蔽纏繞すれば、一旦驟に吾が説を聞くのみにては未だ非詆疑議せざるものあらず。(『全書』卷四)

つまり、王陽明は、良知は誰でもがあるが、旧説旧習が人を溺れさせるために、人々は既に形成されている思考様式に慣れていて、良知の学において、すぐに理解できないと考えている。

王陽明の門人徐愛でさえも、「先生のかくのごときの説を聞いて、愛、已に省悟する処あるを覚ゆ。但だ旧説胸中に纏りて、尚ほ未だ脱然たらざるものあり」(『伝習録』上)と述べている。

明らかに、王陽明は、世人が良知説を受け入れにくいのは、世人の胸中にまとわりついている旧説旧習のせいであると考えている。では、王陽明の所謂「旧説旧習」は主として何を指すのであろうか。所謂「朱子の中年未定の説」であると考えられる。王陽明はその説は「独り朱子の説に於いて相抵悟するあり」(朱子晩年定論序)と述べている。

王陽明は三十七歳で竜場において「格物致知の旨を大悟した」後、朱子の格物説と異なる見解を示した。彼は、

朱子の所謂格物と云うものは「物に即いてその理を窮むる」に在り……鄙人の所謂致知格物のごときは、吾が心の良知を事々物々に致すなり」(『伝習録』中)

と言っている。それから、王陽明の講学はほとんど朱子学を批判する口調を取ったと言えよう。「伝習録」だけを見ても、朱子を引用したのは全部で二十個所であるが、「天理の極を尽くして、一毫の人欲の私無し」のほかは、朱子と全面的に対立しているのである。両者の立場は異なるから、朱子学の影響を人々の心から除かなければ、陽明の致良知の新説を人々に受け入れさせることができない。したがって王陽明の所謂「旧説旧習」はまず朱子学を指していると考えられる。

このように王陽明は、人々が良知を致すことができない原因を次のようにまとめている。

君子の学は、以てその心を明にす。その心は本味きことなし、而るに欲これが蔽を為し、習これが害を為す。故に蔽と害とを去けばその明復す。(『全書』卷七)

その門人王龍溪も次のように言っている。

学ぶ者、苟に能く旧聞に泥まず、務めて実<sup>まこと</sup>に其の良知を致し、物欲の間てを去り、以て其の虚体に復るを求むれば、それ萬物の感に於いて当体具足し、虚中りて善応ず。(『王龍溪全集』卷二「宛陵會語」)

明らかに、王門は「旧聞」と「物欲」とを良知を致すことを妨げる二つの障蔽としていっているのであり、つまり、所謂「心中の賊」である。

## 二、「心中の賊を破る」とは何か

周知のように、王陽明は將領と儒者を一身に兼ねていた。將領としての王陽明は「山中の賊」を破ることを任務としていたが、儒者としての王陽明は常に「心中の賊」を破ることを問題としていたと言える。

「山中の賊を破る」ことは即ち「兵を調して剿殺す」と「斬首を行う」ということであるが、「心中の賊を破る」ことは明らかに人々の心中の私欲と胸中に纏いつている旧説旧習を除くことである。言い換えれば、人心を正し、邪説を息んずることである。

では、王陽明はどのような方法で、人心を正し、邪説を息んじて、心中の賊を破ろうと考えているのであるか。

(一) 私欲については、「聖学」を宏揚することを通じて、私に勝ち理に復す。

王陽明は「聖学晦くして邪説横なり、教うる者は復たこれを以て教と為さず、而して学ぶ者も復たこれを以て学と為さず」(『伝習録』中)、「後世良知の学明らかならずして、天下の人その私智を用いて相い比軋す」(同上)という状況に対して、「良知の学を天下に明らかにし、天下の人をして皆な自らその良知を致すことを知り、以て相い安んじ、相い養いて、その自私自利の蔽を去り、讒妬勝忿の習を一洗して、以て大同を濟さしむ」(同上)ことを求めて、「聖学」を宏揚することを以て己の任と為し、生涯講学して、止むことがなかった。彼は次のように言っている。

君子の学は、同志の友、日に相い規切するにあらざれば、すなはち亦た以て悠々と日を度り易くして、激励警発の益あるなし。山中の友朋、亦た此の学を以て日に相い講求する者ありや。孔子云う「徳の修めざる、学の講ぜ

ざる、これ吾が憂いなり」と。而るを況んや、吾が侪においてをや。（『全書』卷四「与陳国英」）

書を読み、学を講ずるは、此れ最も吾が宿好する所なり。今干戈擾攘の中と雖も、四方より来学する者あれば、吾、亦た未だかつて之を拒まざるなり。（同上卷二十六）

彼は各地の叛乱や暴動を征討する際にあつても、弟子たちに学を講ずることを忘れなかつた。年譜にも「先生、賊壘に出入し、未だ寧居するに暇あらず、門人……皆講聚して散せず。」（『年譜』正徳十三年七月）とある。

彼は至る所によく「郷約」を立てたり、学校を興したり、「書院」を創つたりして、「聖賢の学を興起して習染の陋を一洗する」に務めていた。臨終の際も門人に「近來、進学如何」（『年譜』嘉靖七年二月）と尋ねている。故にその弟子錢德洪も言っている。

平生、天下の非詆を冒し、万死一生を推陥し、遑々然として講学を忘れず。惟だ吾人斯道を聞かずして、功利機智に流れ、以て日に夷狄禽獸に堕ちて覺らざることを恐るるなり。（『伝習録』序）

彼は「教化」を通じて「その心体の同然」に復らせることを信じていて、一生の大部分の精力を教育、講学、つまり「聖学」を宏揚する面に投じたのである。

（2）旧説旧習については、朱子学批判を通じて、習俗の害を去る。

前に述べたように、王陽明の思考によれば旧説旧習は人々の私欲の生ずる原因であるし、人々は良知の説を受け入れない原因である。旧説旧習を批判せず、邪説を止めさせなければ、「聖学」を宏揚することができない。では、良知の学を天下に明らかにする障害は何であるか。明らかに前に述べたように朱子学である。朱子学は当時の思想界で主導的地位を持っていて、朱子学的な考え方は世の通念となつていたので、陽明が世人に自分の新説を理解させるのは非常に困難であつた。そのため、陽明の旧説旧習に対する批判は朱子学を攻めることから始まつたのである。三つの点から見ていきたい。

①朱の言を借りて、以て朱を攻める。

前に述べたように、朱子学万能の時代にあつては、朱子学に対しては、針鋒相對の批判ではなく批判がましい口調となるがあつても、それが世の朱子学者の怒りをかい、彼等から非難されることも激しかった。それで王陽明は



その非難の鋒を避け、彼等の口を封ずるために、『朱子晚年定論』を著わした。彼は「世の学者、徒らに朱子の中年未定の説を守りて、復たその晩歳既に悟るの論を求むるを知らず」（朱子晚年定論序）、「朱子の晩年悔悟の説を取り、集めて定論と為し……これを表章し、一辞も加へず、偏心ありと雖も、將にその怒りを施す所なからん」（『年譜』正徳十三年）と述べている。

勿論、『朱子晚年定論』の是非についてはその後の百五十年の間論争が止むことがなかったが、当時この『定論』が出版されたのは朱子学への大きな衝撃であったことは間違いない。

### ② 「古本」を借りて、「新本」を攻める

所謂「古本大学」は即ち『礼記』所収のものを指し、「新本大学」は即ち朱子が改正したものを指す。王陽明の思考によれば、古本の方が文意も明白で、工夫実践の上からも易簡で入り易い。朱子のように何ら改正補輯する必要がないので、朱子の新本の誤りを正して『古本大学』の正当性を論じ、かつその本文のわきに傍釈をつけて、これを出版した。勿論、古本大学の出版はいろいろな議論と非難を招いたが、朱子学の権威地位をある程度揺るがしたことは間違いないであろう。

『古本大学』と『朱子晚年定論』の刊行は「心中の賊」の書簡を出した後、同じ年の大きな行動であり、「心中の賊を破る」こととの関係が明らかであろう。

### ③ 陸を揚げて、以て朱を抑える。

朱子と陸象山とは南宋思想界の双壁と言われているが、その哲学観点は異なっている。ところが、宋末以来陸学が衰退し、朱子学が盛んになっていった。明になると、朱子学が官学として一層重視せられた。しかし王陽明は朱子と異なる考え方を持っていて、陸学と相い通じる。故に陸学が世の人々に重んじられないということは、王陽明には忍びない。したがって、彼は「天下の譏りを冒し、以て象山のために一たびその説を暴はさん」（『年譜』正徳六年）と欲したのである。だが、最初は陸学に加担するわけではなく、陸学も考えてほしいというに過ぎなかった。これは王陽明が四十歳の時のことであった。寧王の乱を平定して、良知学も熟して来ていて、以前のように当時の朱子学者に遠慮する必要がなくなってきたので、陽明は『象山文集』の重刻に際し、序を著して以てこれを表彰した。朱子学

亜流の欠点を指摘し彼等の陸学非難を痛烈に駁論し、聖賢の学が心学であり、陸学はそれを伝えたものであると述べ、陸学を称誉した。これは王陽明が四十九歳の時のことであった。

以上のことは、朱子学に対して批判する際の重要な手段であったと考えられる。それで『明史』は次のように言っている。

（王陽明）教を為すに、専ら致良知を持て主と為す。「宋の周、程二子の後、惟だ象山陸氏のみ簡易直捷にして、以て孟氏の伝に接することあり、而るに朱子『集注』、『或問』の類は乃ち中年未定の説なり」と謂う。学ぶ者は翕然として之に従ふ、世に遂に「陽明学」ありと云う。（『明史』卷一百九十五「王守仁」）

### 三、「心中の賊を破る」は、なぜ「難し」か

将領としての王陽明は兵法に所謂「三軍も気を奪うべく、將軍も心を奪うべし」を深く知っていて、「山中の賊」を破る時に心を攻めることによって、勝利を取った例が乏しくないが、儒者としての王陽明は論語の所謂「三軍も帥を奪うべきなり、匹夫も志を奪うべからざるなり」を深知するわけである。彼は長期的な実践によって、「山中の賊」を取り除くことは易しいが、人々の思想を変えることは難しいと痛感した。では、「心中の賊」を破る事の難き所はどういう点にあるのであろうか。

#### ①己私に克つは難し。

所謂「山中の賊」を破るには、兵を調して剿殺しても、これをはらい除くことができるが、「心中の賊」に対してはそうではない。「心中の賊」を破ることは、自分については「克己」と言い、人については「人心を正す」と言う。従って、人心を正すことは、外からの強制力によって悪をはらい除くことではなく、説得、教育によって、人々が私に勝ち、理に復って、「掃除廓清」するという目的に至るのである。しかし、ひとりびとりにとって己に克つことも難しい。王陽明の友人はこういうふう言っている。

私意萌す時、分明に自心に知得するも、只だこれ他をしてすなはち去らしむること能はず。（『伝習録』上）

王陽明の門人は王陽明に「己私克ち難し、奈何せん」と尋ねたことがある。王陽明は「人は須く『己のためにする』の心あるべくして、方に能く己に克たん。能く己に克ちて、之に能く己を成さん……才かに一毫の非礼の萌動することあらば、便ち刀の割くがごとく、針の刺すがごとく、忍耐して過ぎず、必ず須く刀を去り、針を抜くべし、這れ才かこれ己のためにするの心あり、之れ能く己に克つなり」（『伝習録』上）と言っている。

実は王陽明自身でも、「己私克ち難し」と感じている。しかも、このことから門人たちのために心配した。彼は次のように言っている。

毎に己私の克ち難きに因りて、輒ち諸友のために憂慮すること一番。（『全書』卷四「与黄宗賢」）

王陽明の観点によれば、己私に克つことは全く各人の省察克治の功によるのであって、他人の願望によるものではない。彼の言で言えば「これ各人にあり、願望し得べきにあらざ（同上）」ということである。したがって、王陽明は「人に学を為すを教ふるは、一偏を執るべからず……須く他をして省察克治せしむべし」（『伝習録』上）と言っている。陽明の門人たちの中に、後進を感情のおもむくままに指導しようとした人がいたが、反って仇敵視されることになった。これに対して王陽明は「力量の範囲内において導き励ますことがなによりも大切である」（『全書』卷四「与楊仕鳴」）と説いた。

もう一つは「天理人欲、其の精微を必ず時々力を用いて省察克治す、方に日に漸く見るあり……蓋し窃発して知らざる者あり、力を用いて、之を察すると雖も、尚た見ること、易きにはあらず」（『伝習録』上）と。よって、己私に克つことの難しさは明らかであろう。

## ② 邪説を息んずるは難し。

一つの新しい思想を伝播させること及び人々に受け入れさせることは、旧思想と旧学説からの反発があるはずで、非常に難しい。逆に、一つの思想と学説は一旦人々に受け入れられると、これを人々の中から取り除くことは、同じく難しい。王陽明はこれを熟知していたので、邪説を息んずることを「亦た草率として能くすべきにあらず」（『全書』卷六「寄鄒謙之」）と言っている。

邪説を息んずることは、人心を正すことと同じく、強制的な方法ではいけなくて、教育、説得によるしかできない。

当時の浙江省嘉興県の長官李道夫は、陽明学を信奉し、性急かつ強制的な方法で陽明学を以て政教としようとした。失敗の恐れがあるから、王陽明は李道夫に手紙を寄せて、「力を為すこと易く、効を収むること薄し」（『全書』卷四「寄李道夫」）無理をしないで順序を追って導くようにと譬えを引きながら説いている。

前に述べたように、陽明学の論敵は朱子学であるが、「晦菴の学は天下の人、童よりしてこれを習う、既に人に入ることの深き、論弁を容さざるものあり」（『年譜』正徳六年正月）、しかも「それは非同異は、毎に人の勝心を持ち、旧習を便として、己が見を是とするより起る。故に勝心旧習の患たる、賢者も免れず」（『全書』卷七「象山文集序」）。したがって、王陽明は「聖人の学は、明かにし難くして惑ひ易し、習俗の降ること、愈々下くして益々回すべからず」（『全書』卷三十二）と痛感した。その門人王龍溪も「功利の毒、漸々人の心髓に入ること千百年より茲に於いてす」、「吾人千百年の後に生まれ、千百年の陋習を一洗せんと欲せば、以て上、絶学の伝を窺うも、亦た其の難きを見るなり」（『王龍溪全集』卷二「水西同志會籍」）と言っている。

#### 四、「心中の賊を破る」は可能か

王陽明は「心中の賊を破る」ことは「難し」とは言うものの、不可能とは説いていない。「心中の賊」を破る過程こそ、良知を致す功夫である。良知を致すことは「明白簡易」であり、誰でもができることである。したがって人人皆な堯舜となることができ、皆な聖賢となることができるのである。

##### 1. 良知は人人自ら有す。

致良知の学はなぜ「明白簡易」と言われ、なぜ誰でもができると言われるのであろうか。その理論的根拠は何であろうか。王陽明の思考によると、その理由は良知は人人自ら有する所にあるのである。彼は次のように述べている。

某近来却って良知の両字を見得ること日に益々真切簡易なり。朝夕朋輩と講習するも、只だこれこの両字を發揮し出でず、この両字は人人自ら有する所に縁るが故に至愚下品と雖も、一たび提すれば便ち省覺す。（『全書』

卷六「寄鄒謙之」）

良知の人心に在るは、但に聖賢のみならず、常人と雖も亦たかくのごとくならざるなし。（『伝習録』中「答陸原静」）

つまり、良知は聖賢と常人との別なく、誰でも先天的に具有するものであるが、これを尽くすと尽くさざるところに、これらの区別があるのである。しかし、愚不肖でも良知は先天的に備わっているのであるから、これを尽くすことができれば、聖人となれる。それで王陽明は「これ良知、聖愚に同じく具りて、人皆以て堯舜となるべしとなすゆえんのもの、これを以てなり」（『全書』卷八「書魏師孟卷」）と述べている。つまり人みな堯となることができる理由は、聖愚の別なく、誰でもが良知を持つてゐることである。

そもそも、王陽明が致良知説を提唱する目的は、人々に「善を為し、悪を去る」ことをさせるためであるが、彼のその「立言宗旨」をまとめて「善なく悪なきはこれ心の体、善あり悪あるはこれ意の動、善を知り悪を知るはこれ良知、善を為し悪を去るはこれ格物」（『伝習録』下）の「四句教」とした。人心の本体はもとと善もなく悪もないのであり、これを「至善」と言う。そして「善はずなはち良知なり」（『全書』卷六「答季明德」）。では、王陽明はなぜ「致良知の三字を单提する」（『全書』旧序「刻文録敍説」）のであろうか。その理由は「良知を言へば即ち人をして尤も曉り易しと為さしむ」（『答季明德』）、「本体を直指して、学者をして言下に悟ることあらしむ」（『刻文録敍説』）、「ただこれ致良知の三字は尤も簡易明白、実に手を下す処ある」（『全書』卷六「与陳惟濬」）のである。

では、良知を致すためにまず手を下す処は何であらうか。王陽明は「良知は即ち天理なり」「人欲を去り得ば、便ち天理を識らん」（『伝習録』上）と述べている。したがって、「吾が輩の功を用ふる、只だ日に減ずることを求めて、日に増すことを求めず、一分の人欲を減じ得ば、便ちこれ一分の天理を復し得るなり」（『伝習録』上）

このように、私欲を克服することこそ、良知を致すことの手を下すところである。

王陽明は朱子学のように文義の上に工夫をして、実に行わないやり方に反対し、次のように述べている。

今、吾が所謂格物の学を為すもの、尚ほ多くは口耳に流る……只管に天理を講じ来たりて、頓放し着して循はず、人欲を講じ来たりて、頓放し着して去らず。豈に格物致知の学ならんや。（『伝習録』上）

人もし真実に已に切に功を用ひて已まざるば、すなはちこの心において天理の精微は日に一日よりも見え、私欲

の細微も亦た日に一日よりも見えん。もし克己の工夫を用ひずんば、終日只だこれ説話するのみにして、天理終に自ら見ず。人欲も亦た終に自ら見ず……今の人、己に知るの天理において肯て存せず、己に知るの人欲も肯て去らず、且つ只管に尽く知ること能はざるを愁へて、只管に閑講かんこうするも、何の益かこれあらん。且く自己じこに克ち、私の克つべきものなきを待ちて、方に尽く知ること能はざるを愁へよ、亦た未だ遅からず。（『伝習録』上）

王陽明の考え方によれば、何を天理と為し何を人欲と為すかを口だけで論辯するのは意味がない。人は必ず己に知っている人欲を去ることから、工夫をしなければならぬ。こうすれば、何を天理と為し、何を人欲と為すかは自ら日に一日より明らかになるわけである。従つて、良知を致すためには私意を克去せねばならない。

只だ須く私意を克去すべく、便ち是ならん、また其の理と欲との明かならざることを愁へん（『伝習録』上）

このように、王陽明の「聖と作るの功」は朱子学の「聖と作るの功」と相反している。朱子学の方は知識の日に増えることを求め、今日は一物に格いたつて明日も一物に格することによって、「支離繁難」となり、人々にとつて聖賢は眺めることができて、近づくことができないものとなる。陽明学の方は、「日に増すことを求めず」、「只だ日に減ずることを求むるのみ」、「人欲を減じ得ば、即ち聖賢になるべし」。良知の学こそ、このように「輕快脱洒」、このように「簡易明白」であり、「凡そ門墻に在る者、辭説を煩わさずして、本体を指見すること、真に日月の天に麗くがごとし、大地山河、万象の森列、陰崖の鬼魅、皆な化して精光となり、断溪の曲径、皆な坦として大道となる。至愚不肖と雖も、一たびこの体に触れて真知せば、皆な堯舜たるべし」（『刻文録叙説』）。

したがって、「良知は人人自ら有する所」ということこそ「心中の賊」を破る根柢なのである。

2. 天地万物を以て一体と為す。

前に述べたように、人はなぜ私心があるのか、良知の学が天下に明らかにならないからである。具体的に言えば、即ち、「人は天地の心にして、天地万物は本吾もとが一体なるもの」（『伝習録』中「答聶文蔚」）という道理が分からないので、始めて「有我の私」が出て来る。したがって「その天地万物一体の仁を推して以て天下に教へ、これをして皆な以てその私に克ちて、その蔽を去り、以てその心体の同然に復ることあらしむ」（『伝習録』中「答顧東橋書」）。この一体の心は、聖人愚人の別なく、何人も本来もっているものである。故に民の困苦を見れば、吾が身の疾痛と同

じく心に痛みを感じず。これが良知であつて、この良知を致すことに務めるならば、「天下の人を視ること内外遠近となく、凡そ血肉あるもの皆その昆弟赤子の親のごとく、安全してこれを教養す」（同上）。是非を公にし好悪を同じうし、人を視ても己のように、国を視ても家のようになり、天下を一家とし、中国を一人とするようになる。

したがって、王陽明の考え方によれば、私欲を除き、「心中の賊」を破るために一番大切なことは、「天地万物一体の仁を立つ」ことである。そこで、王陽明は致良知説を掲げてから、特にその晩年、「天地万物を以て一体となす」という理論を重視した。良知の本体は即ち「天地万物一体の仁」であり、良知を致す根本的な問題はその心体の同然に復ることであると考へている。それで、この時期、王陽明が講学した中心内容は、「天地万物一体」の論である。年譜によると、嘉靖三年、王陽明は五十三歳、越にあつて学を講じた時、「ただ大学の、万物、体を同じくするの旨を発し、人をして各々本性を求め、良知を致し極めて以て至善に止まらしむ」（『年譜』嘉靖三年正月）。嘉靖四年、王陽明が五十四歳の時、有名な「拔本塞源の論」を公表し、万物一体の思想を痛論した。嘉靖六年、つまり、亡くなる一年前、征途中の王陽明は南浦についた。その翌日、明倫堂で『大学』の講義を行った。

王陽明は、『大学』とは、大人の学であり、「大人は天地万物を以て一体と為すものなり」（『全書』卷二十六「大学問」と『大学』を解釈したのである。王陽明の思考によれば、明德を明らかにすること、民に親しむこと、至善に止まることは、『大学』の三つの綱領であるが、この三者は不可分のものである。明德を明らかにすることは民に親しむことにあり、明德親民の極則は即ち所謂至善である。至善は即ち明德の本体であり、いわゆる良知である。このように、明德、親民、至善を説く『大学』は大人の学で、大人とは天地万物を以て一体と為すものであること、すなわち人己を一体とし、天下の民の苦しみを見ること、己れの身の疾痛と感ずるような万物一体の心を尽くすことは、良知を致すことである。そうであれば、「吾の父に親しみて以て人の父に及ぼせば、すなはち天下の父子親しまざるはなし。吾の兄に親しみて以て人の兄に及ぼせば、すなはち天下の兄弟親しまざるはなし。君臣や、夫婦や、朋友や、推して鳥獸草木に至るまで、すなはち皆な以てこれに親しむことあり」（『全書』卷七「親民堂記」と）。

従つて、王陽明の思想において、人欲を去り、天理を存する根本的な問題は、人々が「天地万物を以て一体と為す」点にあることにある。万物一体の立場に立つことによって、人々は自ら天下を以て公と為すことができるのである。

致良知の学は「知り易く、従い易し」というのは、「正に大端は惟だ心体の同然に復るに在って、知識技能は与り論ずる所にあらざるを以てなり」（『伝習録』中）。

### おわりに

以上のように、「心中の賊」を破ることは、良知を致すことの鍵であり、致良知説の中に極めて重要な意味を持っていると考えられる。「良知は人人が自ら有する」という論は、「心中の賊」を破ることができる理論的根拠であり、「万物一体」の論は「心中の賊」を破る思想的武器である。したがって、「心中の賊」を破る力は良知自体の中にあるはずである。つまり、良知があらわれることである。もし、真に良知を信じきれたならば、良知本来固有の機能を十分に發揮することができ、それは太陽のようなもので、「一たび太陽が出るとどんなげものも姿をかくす」（『全書』巻五「与楊仕鳴」）わけである。そこで、王陽明は「良知の人<sup>たど</sup>に在ること、随ひ爾如何<sup>いか</sup>すとも、泯滅すること能はず」、「爾の那の一点の良知は、これ爾が自家底準則なり……実々落々に他に依着して做し去かば、善は便ち存し、悪は便ち去らん」、「今日、良知の見在することかくのごとくんば、只だ今日知る所に随つて拡充到底し、明日良知また開悟するあらば、便ち明日知る所に従つて拡充到底す。かくのごときは方にこれ精一の功夫なり」（『伝習録』下）と述べている。